

石器時代の経済学

阿子島 香

[読む館長講座①]

東北歴史博物館館長講座概要

2023年4月22日

「東北グローバル考古学 part3—いにしえから、今を考える—」①

はじめに

今年度の館長講座は、宮城県・東北地方と世界の遺跡を比較文化的に捉えて、「温故知新」すなわち現代への意義を探ります。全8回は、次のような内容で進めていきます。「石器時代の経済学」「太古のアート：具象と抽象との間」「日本人・日本文化はどこから来たか」「教育と史跡：仙台城二の丸から」「隣の国と考古学1：サハリン」「隣の国と考古学2：韓国」「北米先住民と開拓者の文化財保護」「縄文の思考・弥生の思考と現代」の順でお話しします。昨年度・一昨年度の講座に引き続いて、「人間とは何か」を大きなテーマに考えていきます。また、令和3年度、令和4年度とも、各回の講座のあとに、改めて補足加筆を行ないまして、エッセイの形「読む館長講座」に再構成しました。そして、両年度分ともに、当博物館のHP上に、PDFファイルの形で公開しております。どなたでも、自由に無料ダウンロードできますので、どうぞご利用ください。

時代を超えて考える

令和3年度は、人類の誕生から、日本列島へのホモ・サピエンスの渡来、そして縄文時代に至る道まで、「時代を追って」考えてみました。令和4年度は、毎回テーマを変えて、人類史の歩みから「時代を通して」考えてみました。今年度は、歴史から現在にむかって「時代を超えて」考えてみます。私たちの郷土みやぎの先史時代、古代の文化遺産の内容は、世界各地の同時代、あるいは同様な文化段階や生活様式の文化遺産と比較した場合に、どのような特徴があり、どのような類似や相異が認められるのでしょうか、またそれはどのように理解していけるのでしょうか、当館長の独自の視点を含めて、探っていく予定です。どうぞよろしく、お付き合いください。

始原の適応・生産・交換

第1回は、「石器時代の経済学」という題で、いったい先史時代や古代の世界を、通貨や貨幣が基本的な分析方法である経済学という分野を参考に考えると、どのような課題が浮

かび上がってくるだろうかという、やや珍しい視点のお話かもしれません。そもそも石器時代のような生活に、経済活動など考慮する余地があるのでしょうか？というの、自然な発想かもしれません。講座の副題は、「始原の適応・生産・交換」としてみました。先史人類にとって、変動する環境条件に適応していくことは、それが経済活動でもありました。

旧石器時代の小集団が、周囲の環境に対応して生活の基盤を構成していた姿が復元されます。季節的な資源、移動生活の方策、石で作った道具と技術など、「環境への適応」が、生存にとって本質的に重要だった時代です。

縄文時代から古代へ

縄文時代の人々は、周囲の自然環境と共生して、集落を構成し、親族を中核にする社会組織も次第に複雑化し、自然への祈りや祖先の祀り、大地に恵みをもたらす超自然的世界も持っていました。土器などの美術的表現も発達しました。食料資源「獲得経済」の段階と歴史学では位置づけられる縄文時代ですが、環境との共生に優れていて、1万年以上も継続する安定した経済を達成していました。集団の間での物資や情報の「交換」は、縄文社会を構成する大きな要素でもありました。

イネを第一とする食料「生産経済」の弥生時代になり、生産物に余剰が蓄積するようになり、社会は「クニ」と階級をもつ新たな段階に踏み出し、また戦争が始まりました。「生産経済」の変化は、古墳時代へと続き、地域の大首長とヤマト国家が成立し、やがて大陸から律令制が取り入れられて、日本の基礎が出来上がりました。以上のような、教科書にもあるような流れは、それでは「経済学」という観点で見直してみると、どのように捉えられるのでしょうか。今回講座の背景にある問題意識です。

「経済人類学」という分野

人類学と経済学の学際的な分野に、「経済人類学」があります。太古の時代の経済的活動を、どのように復元し、分析し、評価していくかは、かなり大きな課題とされてきた学説史があります。今回は、経済人類学の歴史を振り返って、何が論点だったのかを考えてみたいと思います。「経済人類学」分野の確立者とされる、**カール・ポランニー**の研究を振り返ってみます。ポランニーはハンガリー出身で20世紀半ばの「知の巨人」とされる存在で、経済学に与えた影響も大きいものがあります。経済学で当然の原理とされる「市場経済」とは、実は近代ヨーロッパ世界に特有の、特殊なものだった。それは普遍的な制度ではなく、人間の歴史の『大転換』(1944)と言える画期的なものであった。ゆえに近代経済学の手法や法則には、普遍的な適用可能性はないと考えたのでした。

経済人類学の源流としては、イギリスの機能主義・文化人類学の確立者マリノフスキーの、ニューギニア東方トロブリアンド諸島での研究があげられます。儀礼と呪術に満ちた「クラ交易」の民族誌が名著とされます。のちにサーリンズは、新進化主義人類学の理論を発展させましたが、『石器時代の経済学』(1974)という研究を世に問い、「始原の豊かな社会」「一

般化された互酬性」を論じて、衝撃を与えました。実は今回講座の題目は、ここから取っています。

現代の私たちが自明とする、貨幣・通貨・市場経済などは、本来は人間社会の歴史の中で、どういふものなのか問い直すことは、私たちの生活を考える上でも、有用な問いかけと思うところです。「お金の起原」を改めて「温故知新」、考え直してみましょう。

経済学と原始時代

今回は、プロセス考古学の観点を大きく取り入れて、いったい始原の経済とは、どのようなものなのだろうか、大命題に少し触れてみたいと思います。プロセス考古学とは、アメリカで発展してきた、人類学としての考古学のことです。日本考古学から見ると、発想、考え方など、大きく異なります。世界の文化を比較研究することが、基本的な方法です。(令和3年度第1回 「比較考古学の地平」で、詳しく紹介しましたので、当館 HP からお読みいただければ幸いです。)

しかし石器時代のような太古の世界に、現代の私たちが考えるような「合理的な経済活動」など、あったのでしょうか。これは常識的な疑問かもしれません。「経済学」が自明の前提としてきた「経済的人間」Homo economics の概念を問い直すことになるでしょう。個人が、最小コスト、費用で、最大利潤、リターンをあげることを目標に、経済活動における選択を繰り返していくという人間像ですね。

そもそも、貨幣、通貨、という共通の交換手段が存在していたのでしょうか？ また富(とみ)は、どのように計算されたのでしょうか？ 富が蓄積されるとは、原始時代にあっては、どういうことだったのでしょうか？ 疑問は尽きません。

従来は常識とされましたように、先史時代の経済は、未開、未発達、原始的であり、その後の文明の発達から、ようやく私たちに近づいてきたのでしょうか？ すなわち、文明化の以前の社会は、「非合理的な世界」だったのでしょうか？ この課題は、長い間、経済学の重要な論点であり、問題点でした。そして20世紀半ばから、「経済人類学」という分野が、大きな論争をもたらしたのです。

通説的イメージ

昔の教科書風なイメージをいくつか考えてみます。原始時代は、自給自足であり、物々交換を行っていた。原始人たちは、いつも食料の確保に苦勞していた。延々と長い時間、食べ物を求めて放浪し、食料の奪い合いがあった。やがて原始的な貨幣が誕生してくるが、それは貝殻、石でできており(貝貨、石貨)、貝の種類ではタカラガイが代表的であった。農耕社会、牧畜社会(遊牧社会)になってから、飛躍的な発展があり、文明化が進んだ。

しかし、経済人類学は、このようなクラシックな未開社会観、原始経済の姿を、かなり根底から覆したのでした。研究の歴史をたどってみましょう。

マーシャル・サーリンズ

マーシャル・D・サーリンズ (Marshall David Sahlins) は、1930年12月27日から、2021年4月5日までの、90歳の生涯の中で、文化人類学に非常に大きな貢献を残しました。生没地とも、イリノイ州のシカゴです。学部と修士課程をミシガン大学で修め、博士号はニューヨークのコロンビア大学で取得しました。シカゴ大学で教鞭を取りました。

新進化主義人類学の旗手として、ポリネシアの社会進化論を提示し、首長制社会 (Chieftdom) の分析を行ないました。館長講座でも、文化進化論をご紹介した中で、首長が再分配において果たす社会的・経済的役割について考えました。(令和4年度第7回 『首長』から『王』へと至る道』参照)。その後、彼は研究方向を大きく変化させました。レヴィ＝ストロースとの交流もあり、構造主義、象徴主義へと研究を変え、歴史人類学的な構造主義と言われる業績を残しました。キャプテン・クックの伝説を題材にポリネシアの島々の歴史を論じた、『歴史の島々』(山本真鳥訳 1993)などの著作があります。新進化主義人類学の時代は、エルマン・サーヴィスと共に、第二世代の代表的研究者で、サーヴィスとの共著もあります。大きな変化は、アメリカの文化人類学全体の1990年代以降の変動を背景にしているように、館長は評価しています。

元来のゆたかな社会と互酬性

サーリンズは『石器時代の経済学』(1972)において、二つの衝撃的な事実を解明しました。「元来のゆたかな社会」(original affluent society)と、「一般化された互酬性(相互性)」(generalized reciprocity)です。非近代人の労働時間は、驚くほど短いことを示して、日々、汲々として食料を取りに過ごすといった上述のイメージは、実際とは逆であることを問いかけました。狩猟民はあまり労働しないで、かつ必要な資源を獲得している姿でした。より多く、もっと、という一線的な欲望の不在も指摘されました。

また、産物を相互に分ち合う、これは善意ではなくて当然の義務であり、相手に贈るものも、時間を経てから戻されるもので「金額」で計算はしません。一般化された互酬性を、経済活動の圏域の広がりとの関係で考察したのが、こちらの図です(スライド)。家、リニージ、村落、部族、部族間を示して、分かりやすいでしょうか。

互酬性という行為は、現代の私たちの生活でも一部に残存しています。見返りを期待しない贈り物(非取引)、時間と価値を計算しない贈答、家族・親族・愛する人への無償の「あげる」「尽くす」などは、市場関係とは別の行為ですね。

多くの非近代社会・文化では、「互酬性」が、非常に広範な範囲で働いています。狩猟民のフィールドワークの物語・民族誌を読むと、ヒトのものをもって、ごく当たり前、感謝しないで「お前は持っているのだから」という場面がよくあります。しかし彼らは「欲が深い人たち」なのではありません。互酬性が大きく働いている社会なのです。そして、ごく自然に、互酬性という観念もなく、当然の行動を行なうのです。

人類史上の「大転換」

さて、貨幣（通貨）の有り無しと、社会の複雑さ、文化の統合の度合いとは、どのような関係にあるのでしょうか？ 単に、社会や文化が未発達だと、貨幣経済も未発達と、なんとなくそのように考えてしまいますが、経済人類学が教えるのは、両者は、異なった二つの次元、基準であるという一般的な原則です。近代社会、現代の私たちは、「お金」なしの生活は、想像もできません。人生の価値基準をめぐって、いつも尋ねられる問いかけは「お金は、一番、大事なものですか？」であることは、雑誌やテレビやその他でのありふれた問いです。それだけ完璧に、現代はお金が浸透しきっていることを表します。

ポランニーが指摘した大きな思考の逆転は、市場経済は、ヨーロッパ近代による、歴史的に特別な現象であり、人類史上の「大転換」（great transformation）なのであったという命題でした。圧倒的に多くの歴史的な社会は、近代の「市場原理」とは異なった原則が、それぞれに支配していました。そして、市場経済以外の多くの社会は、「遅れている」のではない、という主張でした。近代市場経済の社会が、むしろ特異的なものなのだ。多くの社会の経済が動く原理を、それぞれに解き明かすことが重要なのだと。そして、経済学の学史上も重要な、論争が展開しました。実体論・実体主義経済学（substantivist、実在主義とも訳す）に対しての、形式論・形式主義経済学（formalist）の論争でした。

キンケイとマルケイ

当館長講座は、歴史学・考古学の分野ですが、冒頭の「お題」は、それらと経済学のクロスオーバーになります。そこで、若干の学史の確認をいたしましょう。スライドの人物写真のように、三大経済思想として通説になっているのは、マルクス経済学、ケインズ経済学、新古典派経済学です。それぞれ、カール・マルクス（19世紀後半～）、J.M.ケインズ（20世紀前半～）、アルフレッド・マーシャル（19世紀後半～）を代表とします。四大経済思想ですと、「歴史学派経済学」（ドイツが中心で、最新歴史学派として、マックス・ウェーバー）が加わります（通説）。

1970年代の大学新入生たちの会話（仮想的）がありました。「その授業って、キンケイなの??」。エッ?! 「謹啓?（手紙を書く人）」「近景?（写真が趣味の人）」と連想した新入生でした。当時、「近経・マル経」は、まだ大学各校で生きていた、学問分野の分類でした。実際、授業の内容は、ほとんど全くといっていいほど違いました。マルクス経済学は、原書で読む哲学的思想史、それに対して近代経済学は難解な数式（文科系にとっての難解です）を駆使する授業、まるで異なる分野でした。その後、1990年頃の社会主義圏の崩壊があり、一方で大学人の世代交代が進んだことから、この分類は「死語化」したようです。

ピンフォード派とゴドリエ学説

しかしながら、世界的には、学術的重要さは引き継がれていて、特にフランス、イギリスでは、現在も継承的に発展しています。フランスのゴドリエなど、構造マルクス主義人類学

は、今も理論的重要性を失っていません（館長の評価です。諸説あります）。たとえば、ゴドリエ（1986）では、生産関係・生産様式をめぐって、「なぜ経済が社会の中であれこれの場所をしめ、親族関係だとか、政治的ないし宗教的關係だとかの内部に＜埋め込まれて＞機能するのか、あるいは機能しないのか、その理由を」（山内訳、220頁）説明することの重要性を指摘しています。経済行為を理解するためには、文化全体の統合的な観点が、常に不可欠であることを指摘しているのです。私は以前に、考古学上の理論という面から、ゴドリエ学説とビンフォード派の学説とを比較して論じたことがあります。関心ある方はご参照ください（阿子島 1989『考古学ジャーナル No.305, pp.158-170』）。

考古学理論の専門的などころですみませんが、経済人類学的に重要な部分ですので、一部を引用しておきます。「個別の歴史の中で形成されてきた、諸民族に特有の行動様式と社会構造、そしてそれらを支える価値基準が、長期的に選択圧の働く適応的経済過程といかに適合・不適合していたかが議論されていくべきであろう。象徴と適応とを統合的に考えていくのは可能であろう。ここに、個別民族の軌跡の詳細なる実証的復元（プロセス考古学が軽視してきた面）が、文化進化の研究において緊要なる所以がある。一旦成立した統合的文化は、独立変数として働く。上部構造が多様である故に、適応過程そのものが、歴史的に形成される多様性を有するのである。（適応を分析視点に従っていかに定義したとしても）。従って、「ビンフォード派」の、経済行為のみを変数として定義して、比較研究を蓄積すれば通文化的法則が浮かび上がるという考え方は、理論的一貫性の面からも深刻な修正が必要なのである。」（阿子島 1989, p.165）。

ポランニーの実体主義経済学

カール・ポランニーは、1886年オーストリア＝ハンガリー帝国だったウィーンに生まれ、1964年に亡命していたカナダで亡くなりました。晩年はニューヨークのコロンビア大学経済学部で研究・教育に従事しましたが、妻がロシア人で、（また自身も社会主義的思想・活動史があったためか？）、アメリカに永住権が得られず、カナダからコロンビア大学に通っていたということです。ハンガリー、オーストリア、イギリスで、弁護士、ジャーナリスト、教師などをしながら、経済学史上に画期となる研究の基盤を築きました。北米に移住したのは1947年で、そのころのアメリカは冷戦の中で反社会主義の嵐が吹いていました。（参考：若森 2011、2015）。

主著とされている『大転換』が出版されたのは1944年で、北米に渡る前でした。ポランニーの専門は経済史とされることが多いですが、それにとどまらない広大な知識と洞察で、「経済人類学」の祖・確立者とされ、20世紀前半から半ばの「知の巨人」といわれ、のちに遺稿集も編集・刊行されています。また若い頃より、社会運動においても熱心な活動家でした。繰り返しですが、実体主義経済学（実在主義、実体論、実在論、複数の訳語がありますが）、**substantivism** 経済学の代表とされます。

また、先にご紹介したサーリンズは、コロンビア大学で1954年に博士学位を取得してい

ます。コロンビア大学では、ポランニー、また生態人類学の祖とも評価されるジュリアン・スチュワードとも接点があったわけです。サーリンズが学部・修士を修めたミシガン大学には、レスリー・ホワイトがいて、新進化主義の牙城といえるような存在でした。ビンフォードもミシガン大学で博士学位を取得しました。学者の名前がたくさん出てきて恐縮ですが、いずれもアメリカの新進化主義人類学系統の重要な人物で、これらの一群の研究者に限られた大学にあって、当時きわめて支配的であった多数派の、フランツ・ボアズ影響下の個別実証主義の文化人類学と対峙していたという図式を描くことができます。古典的名著も多いですが、翻訳書を手にするときに、当時の学者たちの間の影響関係まで踏み込んで読みますと、理解が深まります。そのようなグループ（広い意味での学派）では、理論的な基盤（考え方）に共通性もあるので、多くの研究史を整理する理解にもつながります。

ポランニーの多岐にわたる業績から、ここではアフリカの奴隷貿易、古代メソポタミアの経済に関するものを少しご紹介します。繰り返しの確認になりますが、当時の経済学主流は「形式論者」でした。市場経済の形がなくとも、経済活動は合理的であり、近代経済学の法則は適用可能である、としていました。ポランニーは実体の経済を重視して、多くの「未開社会」とされた経済では、共同体的相互扶助、宗教活動、儀礼、親族関係などが重要であったこと、互酬性、再分配、交換の3者の統合形態が研究されるべきこと、市場や貨幣が発達していないのは、遅れているのではなく、独自の社会的文化的制度の中に、経済行為が埋め込まれていて、統合体を形成していること等を、理論的に論じました。

イギリス経済の変革期を分析して、人類史において近代市場経済とは、特殊なものであり、決して普遍的な制度ではないと論じて、多くの歴史的文化に対しては「近代経済学は、無効である」としました。ドルトン（ノースウェスタン大学）は、ポランニー学説を受け継ぎ、経済人類学の専門雑誌創刊など、活躍しました。

西アフリカの奴隷貿易と、古代メソポタミア経済

ポランニーは、社会思想の面でも多くの課題を論じました（若森 2015）。一方で、経済学史上では、非市場経済の分析を行なって、経済人類学の理論的な画期となったことは前述しました。18世紀のダホメ王国の経済社会の、制度的運営とその原理を考察しました。沿岸部の「交易港」（port of trade）概念、通貨では互換しない物品による「取り揃え品目」交易システムなどを論じました。会場では、史料・資料に基づいた研究と、それらの背景となっている時代と社会について紹介しました。

（スライド多数で、西アフリカ・ギニア湾沿岸の地域、象牙海岸・黄金海岸・奴隷海岸、フランス・ボルドーなど商工業都市からの三角貿易、奴隷船の図、歴史博物館展示の奴隷貿易、貿易の取引過程、貿易中継拠点としてのセネガル・ゴレ島の城塞（「負の世界遺産」といわれます）、争う部族同士の間で奴隷を捕虜とし、銃器と財物で強大化した歴史、アフリカ社会が崩壊した結果の現代への影響、など）

（スライドで、古代メソポタミア文明の事例、バビロニア王国の版図拡大、ハンムラビ法典

の石碑、ルーブル美術館所蔵のわけ、スサ遺跡の発掘、「目には目を、歯には歯を」、太陽の神がハンムラビ王に権威を付与するレリーフ、人類最古の楔形文字、膨大な粘土板文書にある記録、負債・報酬などの慣習法の規定、近代経済学的「等価概念」の非適用、など)。

貨幣の起源をめぐる

さて、貨幣の起源を考えてみましょう。もちろん諸説ありますが、多くの解説にある通説を見てみます。中国の場合は、やはりタカラガイ（また子安貝ともいいます）説が強く、歴史資料としても有力です。スライドは、中国最古の王朝（二里頭遺跡など「夏王朝」実在を最古とすれば、二番目）である「殷王朝」の時代のタカラガイ製の原始通貨です。穴が開けられています。次の写真は、春秋・戦国時代の楚という国の通貨で、「蟻鼻銭」という銅貨で、タカラガイの形状を模したものとされますが、アリの顔に似ているのでこの呼称があります。春秋・戦国時代は、紀元前 770 年から紀元前 221 年の間で、当博物館の昨年度冬の特別展「キングダム 一信一」の舞台になった時代です。もちろんフィクションですが、原泰久さんによる物語では「南の超大国」として描かれていました。秦が中華を統一しますと、「半両銭」が発行されました。貨幣と度量衡の統一は、広域の国家統治にとって、重要な側面です。

中国古代の貨幣の起源については、東北大学名誉教授の山田勝芳先生の著作に、実証的に詳しくまとめられています。（山田 2000『貨幣の中国古代史』朝日選書）。日本の貨幣の起源については、東大名誉教授の今村啓爾先生が詳細に論じられています。（今村 2015『日本古代貨幣の創出 一無文銀銭・富本銭・和同銭』講談社学術文庫）。

中国古代の貨幣は「古幣」とも呼ばれます。刀や農耕具を模した各種の形があります。大尖足布、尖足布、円肩方足布、反首刀、円首刀など、「布銭、刀銭」といわれるもので、周王朝（銅貝貨）の後、春秋時代から戦国時代にかけて流通しました。これらスライドは、銀行の資料館 HP からお借りして映しているのですが、（日本銀行、三菱 UFJ 銀行）、銀行さんはホントにお金が好きですね（失礼しました）。

一般に、始原貨幣の要件として、次のような性質が挙げられます。希少性、遠隔地の産物、製作の困難さ、利便性、また可搬性、秘匿可能な形状と大きさ（蓄積に通じる）、共通価値としての社会的認識、美的優品、などです。確かにタカラガイは、このような条件を満たすようです。南海の地方産貝殻が、遠く運ばれて最古の貨幣の役目を担いました。

中国最古の文字は、殷王朝の甲骨文字です。カメの甲羅や、ウシの肩甲骨に、文字を刻んで、火で焼いて、神聖な占い（ト占、ぼくせん）を行ないました。甲骨文字から漢字が発達しました。現在も日本で使われている漢字の中で、お金や商取引に関して、「貝」の部首を持つ漢字が多数あることに気づく方も多いと思います。「貸借」「貨物」「贖罪」「貢納」「購入」「貿易」、まだまだ辞書を開けば、たくさん見つかります。現代と古代がつながっていると、改めて思うことです。

日本の通貨製造の始まり

日本最古の貨幣として、館長が学校で学んだころは、奈良時代直前からの「和同開珎」（708年、和銅元年）を教えられました。その後、1998年に奈良県明日香村の飛鳥池遺跡から、「富本銭」がまとまって、製造過程の資料を含めて出土して、教科書は書き換えられました。まとまった出土がありますと、それまで僅かに見つけていた資料も、改めて位置づけられることとなります。これは考古学という学問の常と言えそうです。日本書紀で、683年（天武天皇）に、「今より以後、必ず銅銭を用いよ。銀銭を用いることなかれ」とあります。富本銭がこの銅銭で、銀銭に当たるのが穴のあいた図案のない「無文銀銭」であるのか、多くの議論がなされています。飛鳥池遺跡は、飛鳥寺の東南に位置する、銅・鉄・ガラス・漆製品などの、先進的な一大工房群であり、日本古代国家の確立過程の一環として理解されます。都城建設（藤原京）、法整備（大宝律令へ）、史書編纂（日本書紀）、貨幣鑄造など、唐を模範としつつ日本の現状に合わせた古代国家建設の一部でした。

富本銭は、唐の「開元通宝（寶）」をモデルにしたと考えられ、サイズや重量が似ています。この形は中国古代の「方孔円銭」と言われる型式で、秦の「半兩銭」や前漢の「五銖銭」以来、東アジアに広大な広がりを持った形です。日本では奈良時代から平安時代の「皇朝十二銭」から、国家として鑄造がなかった時代には中国の宋銭や明銭が大量流通し、江戸時代の「寛永通宝」（私たちシニア世代には、昔の人気時代劇「銭形平次」でおなじみ）で統一され、明治時代までこの「方孔円銭」が、ゼニの定型でした。朝鮮王朝（李朝）には、「常平通寶」がありました。館長は文明史的に「東亜型銭貨」とでも呼びたいところです。（読む館長講座令和4年度第8回「古代東北と世界の六大文明」参照）。

現物経済と貨幣経済

さて館長なりに、試論的に整理してみましよう。私たちは近代以降の貨幣経済の仕組みと原理で、古代を考えてしまう傾向があることに注意しなければなりません。経済の発展段階ではなくて、社会の統合の仕組み（原理）が違う文化が多く存在します。貨幣経済に対して現物経済という場合も、現物経済に2種類あるでしょう。現物が、貨幣のように社会的役割を果たすシステムと、経済が、共通の交換価値で組織されていないシステムとを、区別して考える必要があります。

交換手段・蓄積手段・財物（すなわち力の源泉）として、貨幣以外のモノが、通貨的な価値を有して、社会で共有されている場合は、世界の歴史でしばしば見られることです。身近なところでは、江戸時代のコメ、米相場、貨幣とコメの互換、金と銀と銅（銭貨）の並行した、基準財としての流通を思い起こすことができます。

また、社会が高度に組織化されているが、経済が通貨を主として使用することなく機能している場合は、歴史的に珍しくありません。このあたり（多賀城）の律令制の時代を例に考えてみましょう。世界史的にも、綿密で高度な社会組織と、文書行政、統治（支配）の仕組みは、確立されていた社会と評価できます。しかし村々、家々、人々は、今のように日々「お

金」(貨幣)は使用しなくても、社会は維持されて経済は機能していました。さかのぼって古墳時代、このあたり(東北中南部)は、日本古代国家の始まりの北限の一部を構成していました。大型古墳を築造し、埴輪を製造する社会であっても、人々の日常の暮らしは通貨を介することなく、経済が再生産されていました。

地方官衙の「総柱」建物跡

律令制時代の、「高度現物経済システム」(館長仮説概念)を象徴しますが、古代国家の領域内に入る地域の、日本列島の津々浦々で発掘されます「総柱」の地方官衙建物跡です。専門家の先生方には多分お叱りを受けるのは承知ですが、経済人類学的な見方をしてみると、実に高度な機構が機能していました。社会を組織する仕組みが強制力を持って貫徹し、逃れるすべがありません。総柱建物跡といいますのは、桁行(けたゆき、建物の棟の方向)と梁行(はりゆき)、(3間X3間とか、3間X2間とか)の周囲だけでなく、建物の内部にも格子状にすべて(総て)柱があるような建物のことをいいます。これは、非常な重量物を長期間保管する倉庫としての構造でした。全国的に郡家(ぐうけ、こおりや)=郡衙の倉庫建築として採用されました。古代の高度現物経済における、財の蓄積として、日本列島ではコメ(穀稲)が再重要で、また布も重視されました。

マルクスがいみじくも強調していたように、新しい経済価値を生み出すのは人間の労働です。高度現物経済においても、生産物(穀稲、布)と同様に、人間の労働も統治対象でした。また、日本列島の多様な自然環境の中では縄文時代以来、生産物は地域によって多彩でした。このように見てみますと、律令制のシステムすなわち「租・庸・調」は、通貨不要の高度経済機構であったという見方もできるわけです。システムから逃れることができませんから、貧窮化したり、流民化したり、上代文学でしばしば描かれるような生活も時に現実でした。

奈良の都や畿内地方では、貨幣はそれなりの流通をみたようですが、地方では、伝統的な現物経済を中心とする仕組みが、長期間にわたり根強く継続していました。米、布、真綿、緋(あしぎぬ)、塩、などがありました。国家は「蓄銭叙位令」(711年)を出して位階を与えるよう定めたり、都城造営などで銭貨支払いを行ったりしました。経済学・経済史系の歴史叙述ですと、貨幣経済の浸透を進歩として評価して、そうでない現物経済を「遅れている」状態、またなぜ貨幣経済が妨げられたかというような記述に出会います。中世の宋銭の大量流通についても、同様な歴史観があるようです。しかし、これは相変わらず、すぐれて「形式論者経済学」的な見方であって、経済人類学70年の研究蓄積を十分に理解していないと思います。

三十三間堂官衙遺跡

倉庫の調査事例を紹介しましょう。平安時代の非通貨的・高度現物経済による、生産物(イネ)の集積と国家による管理の例(あくまで一例です)は、身近なところでは、たとえば宮

城県亘理町にある三十三間堂官衙遺跡の倉庫院（正倉院）地区の総柱建物の規則的配置に認められます。この遺跡は、常磐線の逢隈駅から西側へ登った丘陵の上にあります。遺跡の存在は、礎石が並んでいる場所として江戸時代から知られ、1930年代には東北帝国大学の犬類伸教授が調査して、古代の仏寺もしくは神社である可能性を指摘しました。

その後、1960年代に宮城県教委が測量調査を実施し、平安時代の寺院跡の可能性が出されました。1978年に伊藤玄三氏は、陸奥国亘理（曰理）郡衙と推定しました。1986年から2013年に、県教委・町教委により発掘調査が進められて、遺跡の内容が解明されました。

近年、亘理町教委は、「史跡三十三間堂官衙遺跡整備基本計画－平安時代の陸奥国曰理郡衙跡」（2020）をまとめられています。整備計画では北方の郡庁院（役所と実務官衙の地区）、南方の正倉院（倉庫院）の配置が重視されます。南側の正倉院地区では、総柱の建物跡が並んで配置されていたことが分かります。（スライドで紹介）。

大崎市南小林遺跡

古代律令国家は、蝦夷の地であった北方への境界を拡大するために、国家的に強力な政策を続けて、長期間にわたって紛争、戦争が断続しました。律令国家の確立期であった7世紀後半から、大きな動向が遺跡に認められます。この頃すでに、総柱の倉庫が作られていたことを示す事例として、大崎市古川にある南小林（みなみおぼやし）遺跡があげられます。遺跡は江合川旧河道の北岸自然堤防上に立地し、7世紀後半から8世紀前半まで、3期にわたり郡衙的（？）な施設があったと考えられています。掘立柱建物跡、竪穴建物跡、東西に延びる材木堀などが発掘されました。1期には関東系の土器（土師器）が出土しています。3期には、5棟並ぶ**総柱建物**があつて、倉庫院の一部と考えられました。柱穴には焼土が入っていて火災を疑わせ、炭化米（粃）が出土しています。史書（続日本紀）に720年、724年の蝦夷の反乱記事があり、この動向との関係を考える見方もあります。

初期国家の経済統治機構

古代日本では、隣接地域の権力それぞれの相互の争いを避けるメカニズムがあり、律令制国家の秩序である、「国郡里」の組織化で、戦争を避ける機構となっていました。同じ初期国家段階（エルマン・サーヴィスの **primitive state**）でも、たとえば西アフリカの部族国家の連合と比較すれば大きな原理の相違が働いてきました（ヨーロッパとの奴隷貿易時代に、未開国家のプロセスが破壊的な結果を招きました。初期国家の王権相互がヨーロッパとの奴隷貿易で抗争し、戦争が破滅をもたらしました）。おそらく弥生時代の「クニ」原初未開国家の段階から、日本列島では相互の戦争を避ける機構ができていたようです。（史書にある「倭国亂る（乱る）」記事の歴史的評価は諸説あり、また別の機会にいたしましょう）。

日本列島古来の自然信仰が、巫女的儀礼を通じて、クニ同士が連合して初期国家を成立させるという道筋を辿ったようです（ヤマト王権の共立）。政治的権威が宗教的権威に支えられて、初期国家の政治構造が、各地域の有力首長の成長と相乗的な効力をもって、全国的に

進行しました。福島県会津若松市の会津大塚山古墳の造営と副葬品の数々も、このようなプロセスを示しています。

古墳時代から発達してきた地域経済における人的な支配機構は、「在地首長層」というキーワードで理解されてきました。古墳時代後期の群集墳から横穴墓の集中地の立地が、律令制開始期の地方官衙の立地と整合する地域事例（福島県浜通り・中通り地域、宮城県南部地域）があげられます。古墳時代から発達してきた在地における人的支配機構が、生産物の集積と蓄積を仕組みとして、ヒトとモノの総合統治機構を、貨幣経済なしでの現物経済機構として確立したと捉えることができます。

プロセス考古学的思考と、日本考古学の実証的研究とは、矛盾なく整合する理解で、世界史に対しての列島規模での事例を提供するに違いありません。それならプロセス考古学など不要でしょうと叱られるに違いないですが、現実には地域で起きた歴史を、世界史レベルの比較研究として考えてみるという点が、違います。世界の各地を比較していきますと、類似する型と相異なる型とがあり、それはどうしてだろうかと、思考を深めていくことにつながります。今回は牧畜社会、遊牧社会、騎馬民族国家などには触れていませんが、親族関係を含めた社会組織の構成原理、人的支配機構と価値を共有する財の蓄積機構（土地・作物と、家畜・遊牧）など、興味尽きないことです。私たちの祖先の郷土史（一国的な史観）という枠を一旦離れることで、新たな視点が得られてきます。

神聖政治から政教分離へ

グローバルに比較してみますと、初期国家段階においては、統治者が力の源泉とする権威として、神や天、超自然的な力が、かなり普遍的に権力の拠り所として祀られ、それによって王権が精神的に維持される仕組みがありました。権力の源泉は、人から神へ移行するパターンともいえるでしょう（ビッグマンから、神人仲介者へ）。王たちは、天（自然の力）と地（人間世界）との間に立って、両者の関係を取り持つ社会的役割が期待され、またその力量によって権力者としての社会的認証を受けました。たとえば、雨が降らない、火山が噴火しつつある、平原の王朝では洪水を制御するといった事態に対し、天をなだめる、祈祷するなど、社会の総体を維持することが不可欠の役割でした。これは時に、王権側の命懸けの行為でもありました。

古代国家の祭政一致は、広範なパターンといえます。首長制段階の社会において、首長の期待される役割が「生産物の再分配」重視であったことから変質しました。（読む館長講座令和4年度第7回『『首長』から『王』へと至る道』参照）。古代中国の中原地方での、龍（竜）の信仰（龍神をめぐる信仰）と、水を司る伝説の王の物語も、この脈絡で理解できるでしょう。古代エジプトのナイル川の季節的洪水に伴う多くの技術（測量など）、古代メソポタミアの灌漑農耕の統御はじめ、形が違っても機能が類似するという、相似的なパターンです。サイズの的にも、古代帝國的な広大な国家から、地域共同体が並立する小規模な初期国家（ないし分節国家）まで、神と政は不可分な時代がありました。

群馬県渋川市の金井東裏遺跡から、2012年に発掘された、甲（よろい、小札をつないで綴じた「挂甲」）を着用したまま発掘された古墳人（成人男性）は、あるいはこのような地域王権の一部だった可能性もあるでしょう。6世紀初頭に大噴火した榛名山の、火砕流に呑み込まれて犠牲になりました。現在、群馬県立歴史博物館で、リニューアルした展示でも紹介されています。

宮城県の古墳時代も、地域首長がヤマト王権と取り結んだ政治的関係の中で、大型古墳が造営されていきました。日本古来の自然信仰が融合していたことは、たとえば石製模造品が大量に発見される遺跡に、その状況を窺うことができます。石製模造品は、滑石など軟らかい石材で、数センチ位の小型の品（刀子形、有孔円盤、勾玉など）を作り、祭祀を行うものです。古墳からも出土します。村田町の新峯崎遺跡からは、111点の土器（土師器）と701点もの石製模造品が、まとまって出土しました。祭祀を行った遺跡と考えられています。（村田町歴史みらい館に展示があります）。

地域首長とヤマト王権との非常に複雑な関係の下に、宮城県の古墳時代も推移して、やがて律令制の波が押し寄せてきます。在地首長層は、それぞれの地での現実的な対応を行なって、後期古墳時代から律令国家の一部へと変質していきました。宮城県の中北部（県北）あたりがその北辺でした。律令制下において、先述の高度現物経済システムがいきわたりました。首長層の下で、各地を移動していた専門工人集団（技術者集団）は、今度は律令制下の技術者集団へと変質、ないし国家中央や朝鮮半島からのハイテク集団と融合・交替していきました。

日本古代のシンクレティズム

この段階において、古墳時代経済の統治に「初めから不可分なものとして埋め込まれていた」（ゴドリエの表現）、地域民衆レベルの祭政一致は、律令制下の相当程度「合理的な」、政教分離的な高度現物経済システムへと転換していったと考えられます。列島古来の信仰は、水辺の祭祀・呪術のような、地域社会で行なわれる形に生き続けました。山岳への信仰（高山と羽山・端山）、万物にカミが宿るとするアニミズム（animism）の原始信仰、祖霊と穀霊の融合など、地域民衆レベルの信仰体系は、一時、潜在して見えにくくなります。しかし脈々として受け継がれてきました。

宗教人類学の分野に「シンクレティズム」（syncretism）という概念があります。土着宗教の上に、外来の宗教が重層し、互いに変質・融合する過程を言います。ラテンアメリカやハワイに、キリスト教が広がり変質していった状況などが分析されてきました。律令制国家の圧倒的な力は、仏教と共に複合し、いわば先端ハイテク・知識技術複合体のようなもので、民衆に十分な威圧感を与えました。統治の絶対性はこうして保障され、聖武天皇期の「国家鎮護」の有名な言葉が示すように、民衆生活とは二重の層となって存在していました。

そして数百年が経過して、仏教の地域社会への土着化が進行しますと、そこに「神仏習合」（神仏混淆、本地垂迹説）が現出することになります。修験道として発展する根強い信仰に

も支えられて、神仏習合がおよそ 800 年間以上にわたって、違和感なく続いていったのは、もともと地域の人々にあった古来の信仰と融合した「シンクレティズム」として存在したからと考えられるのではないのでしょうか。当館の常設展示（中世）にあります、名取市熊野那智神社の懸仏（かけぼとけ）は、そのような状況をも考えさせてくれます。

おわりに：「経済人類学」が教えること

館長の世代は、日本経済の高度成長期が少し落ち着いてきて、というか公害や石油危機、労働運動、学生運動など、時代が転換しつつある頃に、学校生活を送りました。東京オリンピック（1964）から、日本万国博覧会（1970）の時期を経て、経済の「安定成長」などという標語が作られました。個人の価値観の重視、消費という差別化、若者の新しい生活観など、記憶も新たです。当館の、令和 4 年度夏季特別展「欲望の昭和」で取り上げた時代です。ハンディな解説冊子もありますので、手に取っていただけたら幸いです。

まだまだ、経済成長第一主義が色濃く、長時間働くべし、勤勉は美德なり、のんびりは老後に衰えたら、それまではとにかく働くべし、技術革新にかけろ、事業拡大だ、コストを抑えて大きな収入、これらの価値観は身に染みていました（NHK「プロジェクト X」的時代と言ったら叱られるでしょうか）。若者文化が「ズレて来た」と言われたことも、支配的思潮に対してのアンチテーゼというもので、現在のように多様性そのものを前提として、個人の価値を重視する時代とは異なっていました。

このような話題は唐突に感じられるかもしれませんが。しかし近代ヨーロッパ社会の経済が、伝統的な社会の経済に出会ったことで、近代経済学の支配的な原則が、果たして普遍的に通用するものであったかどうかという、形式論者に対する実在論者の激論に至った問いかけがあったわけです。狩猟民をはじめとして、農耕社会においても、伝統的価値が実在する多くの文化における「経済」は、近代社会の原則とは異なった仕組みで、再生産されていたことを、これらの研究は教えてくれました。「怠惰なる未開人」という見方は、近代人の進歩史観による「遅れている」という勝手な評価に過ぎませんでした。市場経済ではない、それぞれの経済の原理（原始・古代に遡る非市場経済の仕組み）を、経済学主流の学者たちは、理解できなかったのです。

ポランニーが名付けた「大転換」以後の、特殊近代社会的な価値観は、いまでも私たちの思考を規定し続けているようです。人類学は、私たちが当たり前と思って疑わない思考に対して、新たな刺激を与えてくれます。今回のお話を通して、私たちが極めて当たり前と思い込んでいる「お金」というものが、いったい人類史の上で、どのような位置にあるのかを、改めて考えてみてはいかがでしょうか。歴史の古文書、考古学の遺跡・遺構・遺物は、文化財として保護されています。それは、私たちに、生活や考え方の原理そのものが違っていった祖先たちの経済に、思いを馳せる機会を与えてくれるのです。

ご清聴まことに有難うございました（最後までお読みいただき、有難うございました）。

(本稿は、当日スライドを踏まえつつ、講演内容に補足して加筆し、再構成したものです。当日は具体的な事例を主にお話しましたが、本稿では理論的な面を補足しています。なお参考文献は、日本語の入手・閲覧しやすいものから選択しています。)

参考文献

今村啓爾 (2015) 『日本古代貨幣の創出』 講談社学術文庫。

モーリス・ゴドリエ (1980) 今村仁司訳 『経済人類学序説』 日本ブリタニカ。

モーリス・ゴドリエ (1984)、今村仁司訳 『経済における合理性と非合理性ー経済人類学への道』 国文社。

モーリス・ゴドリエ (1986) 山内昶訳 『観念と物質ー思考・経済・社会』 法政大学出版局。

マーシャル・サーリンズ (1984) 山内昶訳 『石器時代の経済学』 法政大学出版局。

マーシャル・サーリンズ (1993) 山本真鳥訳 『歴史の島々』 法政大学出版局。

ルイス・ビンフォード (2021、原著 1983) 植木武訳者代表 『過去を探究するー考古資料解読の方法と実践ー』 雄山閣。

カール・ポランニー (1975)、栗本慎一郎・端信行訳 『経済と文明』 サイマル出版会 (ちくま学芸文庫版もあり)。

カール・ポランニー (1975)、玉野井芳郎・平野健一郎編訳 『経済の文明史』 日本経済新聞社 (ちくま学芸文庫版もあり)。

山田勝芳 (2000) 『貨幣の中国古代史』 朝日選書。

若森みどり (2011) 『カール・ポランニーー市場社会・民主主義・人間の自由』 NTT 出版。

若森みどり (2015) 『カール・ポランニーの経済学入門』 平凡社新書。